



©Renaiss Hall, All rights reserved



Kobunko Cafe



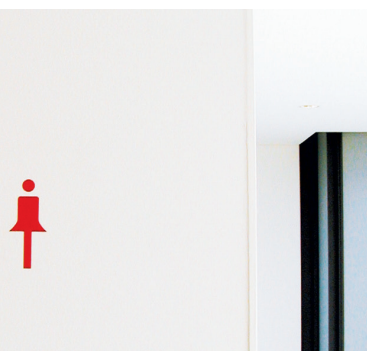
デザイナーは単なる自己表現者ではない。デザイナーは依頼者（以下「クライアント」）がいてはじめて生業として成り立つ。デザイナーの一方的な押し付けでは成り立たず、クライアントの合意を得て世の中にデザイナーが誕生する。もっと言えば価値を共有できないなければ仕事として成立しない。

「ななつ星」の発想を実現させたJR九州にあっばれた。また別の見方をすれば我々のデザイナーをどう活かしていくかはクライアント次第という一面もある。作ったホームページを更新しなかったり、パンフレットを持ち腐れにしていたりすると元の木阿弥だ。病院で処方された薬を飲まなかったり、診断結果を無視した行いをしていると病気が治らないのと同じこと。

中甘いものではない。むしろデザインが台無しになり、ブランドイメージが崩れ、お客は遠ざかる可能性が高い。それでも我々には出来る限りアドバイスはする。しかし深く立ち入って強制的に管理することができず、あとはクライアントの感性と知性に任せるしかないのが現状だ。

金沢のひがし茶屋街には「茶屋遊びの粹」について書かれてある。「前略 客は贅を尽くした空間に遊ぶ、芸と美の後援者でもある。客の側にも芸を解する力量が問われ、旦那衆は茶屋通いのために自ら稽古事をする。芸をたしなみ、洒脱な心がなければ、芸妓が捧げる優雅で粋な場面を楽しめるはずもなく、「野暮」とされる。最上の客とされるのは芸妓を楽

しませるほどの懐の広さを持った者であり、最高の芸妓とは客に我を忘れさせる術を身につけた者のことを言う。茶屋遊びのために旦那衆は労を惜しまず、芸妓はそれに応えて自分を磨き続ける。ひがし茶屋文化は「粋」を至上とする芸妓と旦那衆によって守られてきたのである。



今年で十周年を迎えたルネスホール（旧日本銀行岡山支店。開館当時ロコモックやパンフレット、サイン・ビクト、そして施設内にあるカフェのシンボルマークやショップカードのデザインを担当した。このルネスホールは二〇一二年日本建築学会賞（業績部門）を受賞した。この賞は建築家はもちろん、発注者側である岡山県と施設の運営管理者であるNPO法人、この三者に贈られたものだ。受賞理由をかいついで言う、市民組織（NPO法人）と地方自治体（岡山県）の連携、そして建築学の専門家の創造的な関与を通して、多面的な活動が総合され、地方に残る貴重な歴史的建物の保存再生利用を可能にしている実績を評価されたことのようにだ。建築デザインが優れているだけでなく、その後の運営管理者の継続的で上質な活動も評価されたものであり、デザインの本質を評価する社会的にも文化・芸術的にも実にも価値のある賞だと思ふ。実際ルネスホールでは上質なイベントが数々企画実施されている上に、施設がきれいにくまなく管理されている。無駄な装飾はなく、内外問わず隅々まで清掃が行き届いている。これは運営管理者の意識の高さに他ならない。

一方ビジュアルデザイン。ルネスホールは建築から八十年有余当時（経過した歴史的建造物である。その古き良き趣を活かしつつ、現代の新しい価値観を生み出していく上質な

施設であることが伝わるデザインを心掛けた。ロコモックはルネスホールのシンボリックな四本柱をモチーフに、運営管理者であるNPO法人バンクオアーツ岡山のアルファベット頭文字（BOA）を表現している。また当時「公文書庫」として利用されていた重厚な空間が、オリジナルブレンドコーヒーやビール、ワインなどが味わえる「公文書カフェ」として生まれ変わった。シンボルマークはエントランスをモチーフに、お客様にとってカフェがルネスホール（R）と芸術（A）と時間（T）を結び、心地よい空間であることを表現している。

デザインはデザイナーだけでは創れない。クライアントと一緒に創り上げるものである。クライアントとデザイナー、双方の意識の高さの先に「粋」なデザインは、舞い降りる。

DESIGN WORKS

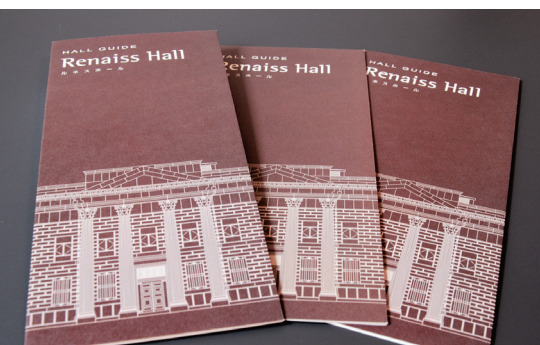
ルネスホール&公文書カフェ／ビジュアルデザイン、サイン計画

「粋」なデザインはデザイナーだけでは創れない

—— 客の側にも芸を解する力量が問われる ——

田中雄一郎／クオデザインスタイル代表

ブランディングディレクター、グラフィックデザイナー



AD・D / 田中雄一郎 設計 / 長野宇平治 改修設計・監理 / 佐藤建築事務所、岡山県設計技術センター DF / QUA DESIGN style

田中雄一郎 / Yuichiro Tanaka

QUADESIGN style (クオデザインスタイル) 代表 www.quadesign-style.com

1975年岡山市生まれ。立命館大学理工学部卒業後、都市計画コンサルタントを経て、2004年妻・園子とともにQUA DESIGN style (クオデザインスタイル) 設立。同時にデザインを独学。現在岡山を拠点に活動し、企業、店舗、農園、医療施設、美術館などのブランディングデザインを中心に手掛ける。主な仕事に岡山大学のコミュニケーションシンボルデザインAMI、福武教育文化振興財団のCI、岡山芸術回廊のVI、ルネスホールのVI、地中美術館、李禹煥美術館のパンフレットデザインなど。2015年4月渋谷ヒカリエ内d7 MUSEUMで開催の「NIPPONの47人2015 GRAPHIC DESIGN」展に岡山県代表として参加。また「地域を熱くする注目のデザイナーたち」「成功させるブランディングのプロセス」「Logo Talks 3」「APPLIED TYPEFACE」など国内外の作品掲載書籍多数。東京TDC賞Prize Nominee、JAGDA賞/ミネート、JAGDA新人賞/ミネート、東京ADC、世界ポスター・エンターテインメント賞2015、中国国際ポスター・エンターテインメント2013入選など。